

『オバジーヌの聖エティエンヌ伝』 試訳（三）

北 館 佳 史

本稿は『オバジーヌの聖エティエンヌ伝』の試訳である。今回訳出したのは前回の続きにあたる第2巻の8章から26章までである。

翻訳の底本としてはオブランの校訂版（Aubrun, M., ed., *Vie de saint Étienne d'Obazine*, Clermont-Ferrand, 1970）を使用し、章と段落の構成は同書に従った。現代語訳としてはオブランの同書の仏訳とペピンの英訳（*The Lives of Monastic Reformers, 1: Robert of La Chaise-Dieu and Stephen of Obazine*, trans. H. Feiss, M. O'Brien & R. Pepin, Collegeville, 2010, pp. 129-255）を参照した。

聖書引用は『新共同訳聖書』に依るが、文脈に合わせて一部変更を加えた。

8. その後、二つの修道院を建設し始め、一つはリムーザンに¹⁾、もう一つはオーヴェルニュに設立された²⁾。ふさわしく建てられると直ちにそこに修道士の一群を派遣し、最良の父たちを任命した。そのうちの一人は³⁾、個人として優雅であるだけでなく、文学の知識、雄弁、洗練、能弁において卓越し、信仰においても評価が高かったので、彼を見たら、教義の点で司教であり、愛情の点で父であり、敬虔な生活の点で修道士であると——これは実際正しいのであるが——思うであろう。

もう一人は⁴⁾、世俗においてこの上なく高貴であり、戦士の武勲に優れていたが、修道生活に入り、戦士から修道士になり、そして生涯の功業により修道士から院長に選ばれた。彼の修道院は厳しいところにあり、資源の不足

に苦しめられていたので、リモージュ司教ジェロー師の提案と指示を受け、数年後にエティエンヌ師によってこの司教座の土地に移された⁵⁾。生前は自分の建てたすべての修道院のことをまるで自分の修道院のように心配して気遣った。

9. 他の場所を建てようとするたびに、エティエンヌは十字架と聖水を持って、少人数の兄弟たちと一緒にその場に赴いた。将来の建物の種類と規模が求められるところに従って、土地が測量されると、祭壇が設置される場所に十字架を打ち込んだ。斧や他の道具を握りしめて羊飼いがするように小屋を建てた。貧窮と欠乏のうちに働いて建て、何日もそこで過ごし、建物が拡張されると、そこに精力的な兄弟を任じた。この場所が建物の追加と所有物の支援で十分に備えられると直ちに修道院の称号で飾った。あるいはもしそこが近過ぎるならば、兄弟たちの使用に役立ち、信心の生活の機会がそこに欠けることがないように、グランギアの役目を割り当てた。

10. 師が世を捨てたときに最初の唯一の同行者であった師の尊敬すべき仲間のピエールはまだ生きていた。この場所が修道院に昇格したときに、彼はオバジヌ修道院の副院長に任じられた。信仰深く、聖なる人物であったが、とても純朴であったので、院長エティエンヌが当時創建された修道院の一つの院長に彼を任命したがっており、彼に任されたお金から必要なものを用意する必要があると邪な心の者たちに吹き込まれた。この話を信じて、貪欲ではなく恐れから、彼に任されたお金から数スーを隠した。彼が送られる場所に少しは役立つと考えたのであった。このことが院長に知られると、激情に駆られて彼を職務から解き、離れたところにある房に居住するように命じた。そこで数年間大いに苦しんで暮らした後、ついに神が地上から天上にお呼びになり、労苦から休息へ、遍歴の旅から祖国へと幸せに旅立った。

聖なる人は彼が純朴で無垢であることを知っているのに、悪意からではなく、やがて来る者たちに手本が示されるように、真の修道生活への情熱

に駆られて、こうしたすべてのことを行った。そうすれば、もし聖なる人がこれほど重要で親しい人でも容赦しないならば、なおさら一層自分たちが容赦されることはないだろうと知って、彼らがこのような行いを避けることができるであろう。

しかし、彼の墓では多くの癒しが起こった。それで彼が無思慮により喪失した聖性のすべてを改悛によってより十全に回復したことが認められた。

11. 同じ頃、都市ローマでは教皇が死去し、尊敬すべき人物であらゆる徳を備えたエウゲニウスが使徒座に選出された。彼は元クレルヴォーの修道士であり、聖ベルナルにより院長としてローマ地方へ送られていた。そこから後に選ばれてローマの教皇とされた⁶⁾。

在位2年目にガリアへ行き、ランスで教会会議を開いた。この時、今は亡き父たるエティエンヌが、前から望んでいたように、兄弟たちとともにシトーを訪れ、そこで前述した教皇に出会った。実際、ずっと以前からこの聖なる修道会に加入し、自らに属するすべてをその權威に従わせることを望んでいたのだった。この頃はレナルという院長がシトーを治めていた⁷⁾。私が理解することができる限り、そして他の多くの人々に明らかである限りでは、他の誰とも容易に比べようがない人物だった。人格の洗練、生まれの高貴さ、謙遜の美しさ、信心の熱意の点で彼が主宰した300人以上いた院長たちに優っていた。さらに神の愛と聖なる信心の力で火の熱さも上回るほど激しく燃え立ち、蜂蜜の甘さにも勝るほど甘い外見で際立っていた。

この人物から私は、ふさわしくない身ではあったが、この聖なる修道服を受け取った。というのも私はラ・シェーズ・デューのある修道院に児童として託されたが⁸⁾、数年後にある人々の策謀によってそこから追われ、世俗に戻っていたからである。多くの苦難によってそこに囚われていたが、最も慈悲深い父であるエティエンヌによって受け入れられた。神への

愛と、上述したように彼が抱いていた私の両親への好意のためであった。

それから私にシトーに行くように命じ、私はそこで修道服を受け取ったが、二年後にこのエティエンヌ師にオバジーヌに呼び戻された。師によって戒律に従って修道士として聖別され、この時から現在まで師とその後継者とともに私は生活している。師について私自身が見たり、他の人から聞いたりした記憶に値することは何でもここに書き記すことを怠らなかった。熱心な読者は自分が欲しいものを選び、欲しくないものは他人に読むのを任せられるだろう。

実際、軽蔑して読む気のない人々やふさわしくない人々のために簡潔過ぎると評価されるよりは敬虔な人々のために冗長だと評価されたほうがよいと思う。少ないものから多くのものを取るよりも多くのものから少ないものを選ぶほうが容易だからである。実際、過度に簡潔に書く者は、読むことを損なうだけでなく、時に大いなる高慢さで特徴づけられる。不当なまでに粗野さを隠そうとし、過剰に洗練を装い、すべての点で他人ではなく自らの利益を追求するときにそうなるのである。

12. それで私たちが語り始めたように、聖なる人がシトーに来たときに、教皇に謙遜して近づき、心の中に抱いていたことを教皇の耳に入れ、自らの希望がその権威によって実現されるよう謙虚に懇願した。

それから、教皇は自分のところに来るようにレナール師に命じた。この万人の父は父に対する息子として師に聖なる人を託した。そして集会でエティエンヌを院長にし、聖なる修道会に結びつけるように命じた。レナールは喜んで彼を教皇の手から受け取り、集会室に連れて行き、全院長の前で喜びに満ちた声で言った。「見なさい、主にして兄弟たちよ。この院長の身体は小柄で背が低く、身なりは卑しく顔つきは醜い。しかし、彼の中に見えるものは何でも聖霊と信仰で満たされていることを知るように」。聖霊に満たされた者が自らに宿る聖霊を神の人に認め、他の人々に示すことができるとしても驚くべきことではない。実際、祝福された神の人はこ

のようであったので、ただ彼を見ただけの者でも、彼の身なりや見かけだけから疑うことなく真に神の僕であると主張するだろう。

教皇猊下の命令が公示され、エティエンヌが個人として謙虚に行った要請が公表されるとすぐに、彼は全院長によって一致して修道会の仲間を受け入れられ、シトー会の修道院の一つに特別に任じられた。ここにおいて彼らは確かに教皇の命令だけではなくエティエンヌの敬虔な生き方に従ったが、彼の修道院にはこの受け入れの妨げとなるものが存在していた。それは確かに修道生活に反するわけではないが、シトー会の慣習に反するようには見えた。このことは確かに強い反感や厄介な問題を引き起こした。聖なる人は男性も女性も自らによって治められるべく受け入れていたが、これは修道会が完全に禁じていたことであった。しかし、彼に対する愛ゆえにこうしたすべてが認められ、自分の魂のように彼を愛するレナル師は、修道会に反するすべての慣習が徐々に廃止されること、そしてまだ新しい修道院が急激な変化に耐えられないといけなかったので、聖なる女性たちが修道会に今後も留まることを約束した。

13. このような保護を受け、生活様式が受け入れられて、私たちの代理人は喜んで自分の修道院に戻った。シトーの父が修道規則を指導するために特別な贈り物として与えた傑出した師たちを連れて帰った。そのうちの二人は修道士かつ司祭であり、聖なる人物であった。他の二人は俗人であるが、劣らないくらい信心が深く、それぞれの技術に熟達していた。五人目の師は、期間が終わって他の師たちが自分の修道院に戻った後も、死ぬまでここに留まった。他の才能の中でも家畜を育てるのに巧みで熟練しており、彼の働きと努力のおかげで私たちの修道院の財産は大いに増大した。

実際、この師たちは以前の師のように粗野でも苛酷でもなく、愛想よく、優しく、親しみやすく、規則の教育に適し、優れていた。彼らの指導により修道士たちが慣れていた多くの点を変更するよう命じられたとき、修道

士の典礼に従って非常に苦勞をして最近作成した書物を捨て、シトーの模範に合わせて作り直さなければならないのは確かに非常に厄介なことと思われた。それゆえ、書物を最初から書き始めたり、消して再び書いたり、完全に放棄したり、少し書き換えて保持したりした。

これらの書物ははじめダロンを通じてシトーからもたらされたので、これほど互いに食い違い、異なっていることは驚くべきことに思われる。しかし、当初シトーで聖務に用いられた書物はかなり間違いが多くて不完全であり、聖ベルナルの時代までその状態であったことが知られなくてはならない。それで院長たちの共同の命令でこの聖なる院長とその聖歌隊員たちによって現在の形に修正され、訂正され、整理されたのである⁹⁾。それゆえ、これらが訂正の前にダロンの修道士たちによって求められた書物であることは確かである。ダロンは当時、修道会に属していなかったが、その規則に従って生活することを切望し、修道会の書かれた慣習に従っていた¹⁰⁾。

14. 他の変化の中でも病人の肉食が戒律に従って認められたが、これはこの時まで私たちの兄弟の間では知られていなかった。聖なる人はこれを必死に我慢していたが、病人のために動物が殺されるのを見たときには神の家に肉屋を持ち込んだと興奮して言った。戒律の病人に関する章を前に示されたときには¹¹⁾、それが彼の気に入ることはありえなかったが、かといって戒律の權威が気に入らないというわけにもいかなかったので黙り込んでいた。

私たちの聖堂が建設されていた頃、修道士たちが来る前に、この出来事を自ら見聞きした者から次のような話を聞いた。すなわち、雇われた職人たちが日々の肉の節制に耐えられず、豚を購入し、その肉を森で調理して食べた。残った肉を客舎に持ち帰り、翌朝密かに食べようとして隠した。

この話が院長に知らされると、激しく動揺し、兄弟を何人か連れて、作業場を歩き回り始めた。客舎に来ると、報告の通りに二つの壺の間に隠さ

れた肉を見つけた。これを取り上げ、連れの兄弟たちの方を見て、どのようにすべきかを尋ねた。貧者に配るべきだと言う者があれば、悲しんで立ち去らないように職人たちに返すべきだと言う者もあった。「兄弟たちよ、このようなことは決してあってはならない。肉がやがては至るところへ行かせてやろう」と答えた。こう言うところを便所に投げ捨てるように命じ、来た道に戻った。

この仕事で雇われていた職人たちはこれを知って激怒し、道具を投げ捨て、作業を放棄した。我を忘れたように神の人に文句を言い、怒りに満ちた言葉を発し始めた。

なだめようと近づき、優しい言葉で怒りを鎮めようとし始めたが、職人たちは侮辱と非難の言葉を投げかけてきた。さらに今後は自分たちも他の者もこれほどの害を与えた人の仕事で働くことはないだろうと脅した。すると彼は脅しを無視して、彼らの弱さと隠した食べ物のことを非難し始めた。食欲の魅力のために神の仕事を放棄したとしても、必要な大工たちが修道院に欠けることはないだろう、そうした者は肉を食べずに彼らよりも巧みに建てられるだろう、また、そうした者が見つからないとしても、神の僕の家が不浄な食べ物で汚染されるくらいならば、神の家が建てられないほうがましだと言った。こう述べると振り返り、立ち去り始めた。職人たちはすぐに痛悔し、彼の後を追って足下にひれ伏し、馬鹿げた言葉の赦しを乞うた。赦しが得られると直ちに仕事に戻った。彼らは健全に更生され、有効に矯正された。

15. こうした事件の後に、以前に造成された場所、すなわち、一つはカオール司教区、もう一つはサントンジュの土地に二つの修道院を創建することにした¹²⁾。この場所を適切に整えると、ふさわしい奉仕者、すなわち司牧者を補助の兄弟たちとともにそこに派遣した。修道院の名で自分たちに任された場所を治めることになっていた。

彼らの中の第一の者は名をジェローと言い、徳の高い人で信仰生活の模

範であった。生き方と言葉で名高く、エティエンヌの後にオバジヌ修道院を幸福に治めた。彼とともに多くの修道院を建て、今は彼とともに離れない仲間として幸せに休んでいる。

次の者は生き方と行いにおいて尊敬に値するロペールであり、今も存命しており、ジェローの後に現在、私たちの修道院を治めている。この二人については後で語ろうと思う。サント司教区にあった修道院を引き受けたが、その前から院長の称号なしに長い間管理していた。

かつてエティエンヌ師に合法的に譲渡され、兄弟たちによって長い間保有されていた肥沃な畑がロペールに属していた。しかし、この地域のある有力者が立ち上がり、この畑は自分の権利に属し、かつて先祖たちが所有していたと主張した。それで、盲目的な貪欲に唆されて、この畑を自分の支配下に置いた。特別に使いが送られ、この話が神の人に知らされると、直ちにこの場所へ赴き、前述の人物に近づいた。この不正な侵害を止め、信仰深い者たちによって神の僕たちに与えられたものを自身の破滅のために奪わないように求め始めた。この人物は彼の言葉に決して同意せず、この財産を返そうとしなかった。この件が公的な裁判に持ち込まれ、聖なる人が正当な贈与により自らのものとなったことを証明できない限りは、決して手放さないと言った。友人たちが双方に助言をし、裁判の日が定められ、双方が自らのところに帰った。

この人物は怠りなく多くの法律の専門家と弁護人を雇った。さらに自己の側の弁護のために司教たちを招いた。一方、神の人は問題を何も把握していないようであり、自分の正義を神のみに委ね、奉仕者と神の貧者の祈りで自らを守った。まるで多くの保護者を持っているかのように安心して裁判に出た。

定められた日が来て、言わば「主とそのメシアに逆らって」(使徒4:26) 司教、諸侯、有力者、民衆が集まったとき、見よ、まるでもう一人のダヴィデがゴリアテと剣や槍ではなく信仰で戦うように、神の人は法律の

知識のない二人の仲間だけを連れてやってきた。これを見て、全員が衝撃と驚きに捕らえられた。笑う者もいれば、「この男がこれほど多くの指導者や有力者、これほど多くの民衆が集まって対抗する男なのだろうか」と言う者もいた。この者に対して彼らのうちの一人がふさわしく礼儀正しくそして誠実に次のように述べたと聞いている。「あなたがたが見ているこの人は、貧しく控えめでほとんど一人だが、今日この人たち全員を打ち負かすだろう。私たちの原告は、約束した贈り物や差上げ物を別にして、弁護人や支持者を 100 スーでも今日はもてなせないだろう。一方、この素朴でみすばらしい人はなんの贈り物も渡さずに 3 ドウニエで弁護人を世話できるだろう。そしてそれよりもすごいことに、一人でこの裁判で勝利を獲得するだろう」と。不確かなことを予言したが、彼の言葉は完全に嘘ではなかった。

その間に反対側の訴えが示された。それによって、あたかも法律の権威によるかのように不正な侵入は正当な所有であり、そして相手は正当に所有しているものを不正に要求しており、正当な訴えではなく、不当な訴えであると言葉をごまかす者たちによって断定された。一方、聖なる人は、神の助けに関して自らを過大に評価し、人の意見を軽んじているように見えないように、自分の立場を弁護するのにふさわしい人物を取り巻きから提供するようにサント司教に謙虚に求めた¹³⁾。司教は敵の側に義務を負っていたが、この要求を正当であると考え、真面目な性格でこのような問題に精通した大助祭を彼に送った。大助祭は敵側がいかに巧妙でどのようにこの素朴な人を陥れようとしているのかを理解し、要求している土地の創設ではなく占有について当面は主張するように助言を与えた。実際、彼らはこの問題で、素朴にそれを認めてしまうと、私のよく知らない議論によって、すぐに同時にすべてを失うように用意された罠に彼をはめようと努めていた。「私たちは土地の創設ではなく占有について主張しています」と述べてこのことを公けに宣言すると、すべての弁護人が怒りに駆

られ、暴力的に振る舞い始め、虚偽の言いがかりで自らを支え、神の人は正しく述べていないと叫び、彼を激しく攻撃した。しかし、前述の大助祭は彼らに反論し、支持するように引き受けた訴訟を堂々と弁護した。

実は司教たちはこちらの側に立っていて、聖なる人が正当な主張をしていることを疑わなかったが、この暴君、侵害者に唆されたために彼に援助を提供しなかった。このことを考え、自分が多数に圧倒されつつあることに気付くと、エティエンヌは彼らの中で立ち上がり、全員の前で言った。「主にして兄弟たちよ、神の慈悲とここにいる司教たちの保護と正義を信じて、私は貧者たちの財産を取り戻すためにここに来ました。というのも『悪人どもの笏が正しき人々の割り当て地』(詩 125：3)を支配することを許さないこと、キリストの羊の財産を狼の攻撃にさらさないことを願っているからです。『羊飼いでではなく、狼が来るのを見ると逃げる雇い人なので』(ヨハネ 10：12)、彼らは羊が苦しんでいるときに沈黙のうちに隠れ、彼らに保護を与えませんでした。必要に迫られて、私はローマの法廷に訴え出て、そこで正当なものを受け取るか、あるいは与えるでしょう」。

こうした言葉に対して騒動が持ち上がり、ほとんど全員が叫び出した。「これほどの法廷でこれほどの有力な人々と高貴な人々に対して上訴し、司教たちを司牧者ではなく雇い人だと呼んだこの男は誰なのだ」と怒って言う者もあった。また、「彼は上訴するが、努力を惜しまずに実現するだろう、そして私たちの主が多くの金を持った何人もの卓越した使いで実現する以上のことを、足に四つも継ぎ当てをした一人の使いで彼は実現するだろう」(ヨシュ9：5 参照)と言う者もいた。

このように論争したが、サント司教は静かになった後に以下のように全員に話しかけた。「兄弟たちよ、私がこの争論を自分の手で終えるために引き受けたことをご存じでしょう。双方の平和と調和のためにできる限り力を尽くしました。しかし、彼は打ち負かされることを恐れ、上級の裁判を求めました。今後この件で裁くのはもう私ではないですし、あなたがた

は彼の上訴を軽率に非難すべきではありません。ですから、期日に自らあるいはふさわしい代理人を通じて教皇の面前に出頭するように双方、すなわち上訴した者と上訴された者に助言したいと思います」と。

このように語ると法廷は解散し、全員が自らのところへ帰った。神の人も数人の仲間とともに自らの住居に戻った。陽気な予言者が言った通りに、敵が大金を支持者に費やしたのに対して、彼はほとんど何も支払わずに勝利を得ることになった。というのも慣習に従って開催中のシトーの総会に行ったときにそこで院長たちや司教たちがローマに行く準備をしていることを知り、精力的でこうした問題に通じた一人の修道士を彼らに託したからである。往復の費用の支払いで助けられ、ローマの法廷でも彼らの援助と助言で大いに強められた。

この修道士は成功して戻り、ブルジュ大司教の裁きにより¹⁴⁾——教皇の命令でその法廷でこの訴訟が再び審議された——前述の侵害者は従者たちの手を通じて畑から奪ったすべての収穫物を兄弟たちの倉庫に戻し、平和のうちにこの土地を自由かつ完全に放棄しなければならないという権威ある決定を持ち帰った。

実際、もし兄弟たちがこの時にこの土地を失っていたら、修道院は現在までであるように決してここに存在していなかったことは確かである。

私たちはこの話を奇跡としてではなく、エティエンヌの誠実と信仰の範例として語っている。ほとんど一人で自分の財産、いやむしろ神の財産を多くの高貴な人々、有力な人々に対抗して暴君の手から取り戻した。彼は人間に希望を置かず、神のみに自分のことを託したのだった。

16. 別の時にある騎士が貧困に苦しみ、貪欲が膨れ上がり、私たちのグランギアから羊と他の家畜を盗んだ。兄弟たちが当時耕していた土地がかつて彼の先祖のものであったことを口実にした。この獲物から家畜何頭かをすぐに従者とともに食べたが、兄弟たちの要請により、期日に院長自身がやってきて、この土地について彼に十分に応答するという条件で残りを

放棄した。

院長は怠ることなく定められた日に他の多くの者とともに来た。一方、騎士は、兄弟たちに大きな不安を与えるために、この裁判から何を得るのかが明白に分からない限りは裁判に出ることを望まなかった。というのもこの讒訴を彼らに平和のうちに下げたならば、より多くの金を得るだろうと期待していたからである。友人たちに迫られて結局、行くことに同意したが、望んだように恐れを与えることはなく、彼自身が恐れることになった。

神の人は状況が求めるならば常に愛想よく陽気だった。彼が遠くから来るのを見て、自分が男に立ち向かったときは攻撃から呼び戻すかのように自分を押さえ込むように仲間たちに言った。男が近づき、声が聞こえる範囲に入ると、聖なる人は仲間たちに押さえ込まれていたが、彼に飛びかかった。「この人が私たちの羊を狼のように奪い、食べた人なのか。この人が主の財産を自分のために奪い取った人なのか。なんという不正な暴君か。なぜ不法に彼らの財産を侵害するのか。確かに彼らが私を止めなければ、この土地のすべての住民の範例として貴公を破門し、悪魔に引き渡すだろう」。

こうした非難に恐れをなし、この男はこわばって固くなった。神の人の顔を見ることに耐えられず、それ以上近寄ろうとしなかった。まず、ここに来たことで自分自身を責め、それから彼をこのような状況に導いた友人たちを非難した。結局、神の靈感と彼のために仲裁したすべての人々に突き動かされて、神の人の足下に平伏し、自分が罪を犯し、不敬虔な行動をしたと叫び、赦しを懇願した。赦しを得ると、不当な強要のあらゆる訴えを放棄した。敵で犯罪者として来た者が友で真人間として去ったのであった。

エティエンヌは何度か裁判に来て、全員が自分の側を支持し、敵が至るところで全員に見捨てられるのを見ると、同情に駆られ、敵の側を守り、

敵のために自分と戦う何人かの者を彼自身の弁護人から密かに送った。彼らに負かされると自分が負かしたように喜んだ。

もし共同作業を除いてどんな技術もない貧しい農民が受け入れを嘆願するならば、彼は直ちに次のように言って管財係のところに送るだろう。「行って、あなたのために私に掛け合うように彼に頼みなさい。しかし、もし軽んじてあなたを追い払うならば、この技術やあの技術をよく知っていると言いなさい。それから、彼があなたに何と言うのかを見なさい」と。この貧しい農民はこのように行い、最初は追い払われたが、次に技術を知っているというので喜んで話を聞いてもらえた。直ちに管財係は院長に近づいて、とても欠かせない人物の受け入れを拒まないように懇願した。この慈悲深い術に騙されて、最初は拒み、その後に悔やんだことをとりなしたのであった。

17. この間にオバジーヌの兄弟は日に日に増加し、最初の住まいの小さな建物では収容できなくなった。以前そうしたように住居を拡張するのではなく、他の場所に新たに移動するように決定された。建設するかどうかについてはもう迷いはなかったが、場所についてはまだ議論がなされていた。山のふもとにとっても快適な場所があり、そこに建設することに心を決めた人々がいた。また、最初の住居を新しい建物に役立て、兄弟の古い墓を新しい墓に加えられるように、最初の場所からあまり遠くないところに建設することを望む賢明な人々もいた。彼らはこれらの理由に加えて、健全な空気、有益な森、庭園、とても実りの多い、長い間耕作されたブドウ畑や他の種類の樹木の財産を挙げた。こうしたものは損害なしには放棄できず、困難なしには遠隔の人々に管理できなかった。

この望まれた場所に多くの農民が家族とともに暮らしていた。もし彼らが見捨てられたならば、魂の大いなる危険を生み出すだろう、そしてもし追放されたならば、同様に大きな罪を犯すことになるだろう。

聖なる人はこうしたことや他の多くのことを高い見地から考えた。最初

に到着した森や場所を放棄したくはなかったが、彼自身の意志ではなく他人の意見に従って行くことを望んだ。「すべては協議の上で行わねばならない。そうしたならば、悔いることはないであろう」(シラ 32:24)という言葉が彼の念頭にあった¹⁵⁾。彼は他人の助言なしでは小さなことでも決して何もしようとしなかった。問題が急を要し、遅滞を許さないとしても、そして単なる兄弟の一人、ことによると従者の一人しか近くにいないとしても、助言を求めるのに躊躇しなかった。その者が震えて「父よ、私に尋ねているのですか」と言うと、すぐに戒律の章を示して「主はしばしばより若い者によりよい道を示すことがある」と言った¹⁶⁾。

助言なしで重要で困難なことを恐れずに行い、そのために前に進まず、むしろ転んでしまう者たちはこのことに注意し、恥じるように。こうした者たちは、他人のよい助言に妨げられたならば、以前はそれが気に入ったとしても、今は自分自身によって始められたのでないから、それを行うことを拒むだろう。ローマの元老院はキリストを受け入れることを拒んだが、それは他でもなく元老院自身によって始められたことではないという理由からであった¹⁷⁾。自分をたいした者であるとみなし、役に立つためではなく、他人に反対するために助言を与えるような者たちにここで言及することに恥を覚える。そうした者は他人が別のやり方をほめたと聞くと反対のことを行い、よりよいことが行われるようにではなく、自分たちが勝者で相手が敗者であることを示すように熱心に論争するものである。彼らは最後に意見を言うが、最初に行われることを望む。前の助言を打ち負かすために後に話すのであり、後に勝利するためにはじめは黙っているのである。しかし、苦々しい話は省略し、本筋に戻ろう。

18. それで、多くの話し合いの後に、古い住まいの端の建物が新しい修道院の端の建物とつながるように、私たちの修道院の上の方に建てることにした。石と石灰と砂が大量に集められ、受難の前の金曜日に、バシリカの土台を掘り始めた。その前に司教ジェローによって周囲の墓地が聖別さ

れた。主の受肉より 1156 年のことであった。それから、枝の主日の前の次の金曜日に、全員が修道院から建設現場に十字架と聖水を持って敬虔に行列をした。連祷と関連した詩編が朗読され、すぐに司教と院長と選ばれた工事長が、聖三位一体の権威に祈願して礎石を置いた。この石はふさわしい敬意とともに置かれたが、「イエス・キリストというすでに据えられている土台のほかに、誰も他の土台を据えることはできない」（一コリ 3：11）と使徒が語っているお方を特に象徴していた。

あらゆる生まれと年齢の数えきれないほどの人々が多くの貴族とともにこの重要な建設の起工式に参加した。そのうちの有力な人々は援助と保護を、富者は金銭を差し上げた。貧者は物では提供できなかったものを誓いによって提供した。手を天上に挙げて、全能の神が彼らの眼の前で始められた聖なる仕事を完了なさるように嘆願した。

教会を通じて人々に懇請するのはほとんどすべての建設者の習慣であるが、この日がこれだけ重要な工事の援助を要請し、獲得する最初であり、最後であった。司教は多くの贖宥に満ちた書簡を与えて頻繁にこれを勧め、むしろ命じるが、聖なる人は次のように言って決して同意しなかった。「私たちはそのような習慣を持ち込むことを望みません。教会を巡り歩き、恩恵を示し、神以外与えられない贖宥を与えることで人々を躓かせ、自分たちに不名誉をもたらしことになるでしょう」と。

しかし、ある司教座で新しい修道院を建設したときには、建設中に人々が修道院に恩恵を施すために、司教に対して懇請の書簡を求めるように何人かから説得された、いやむしろ強いられたと目撃者が語るのを私は聞いた。

気が進まなかったし、自分のために行ったわけではないが、エティエンヌが要請すると司教は喜んで同意し、直ちに書簡を書くように命じた。贖宥の部分に関して言えば、どれほどの贖宥をこの兄弟愛の業に参加する人々に与えたいのかを司教は院長に任せた。「主よ、私たちの罪が押し掛

かってるのに、他人の罪を軽くすることはできません」と答えた。これを聞くと司教は喜んで顔を赤くし、実際にそうであったが、彼が神の人であり、神の僕であり、神を畏れる人であることを疑わなかった。

19. 修道院の建設が開始された後に、多くの苦痛で既に弱っていた小さな身体をさらに痛めつけた厳格さについて誰がふさわしく語れるであろうか。彼は一日中働き、行いではなく言葉で、働きでなく指で、手でなく杖で他人に労働するよう求める高位にある多くの者のように杖を持たなかった。太陽も雲も気にも留めずに足を踏ん張って労働し、働く者も働かない者も全員を見て、言葉よりも働きで各人が何をすべきかを示すようにした。無為に立ったり、座って無駄口を叩いたりする者がいるのを見ると、直ちには叱責せずに彼らの前を通り、まずは恐れ恥じる機会を与えた。しかし、もし改心しなければ、聞いている人々がみな恐れるような激しい言葉で彼らを非難した。労働で疲弊している者を見ると、休息するように招き、彼らの悲しむ魂を心地よい言葉で回復させた。頑固で働こうとしない者たちは厳しく叱責したが、恥じて働きたいが働くことができない者は慰めなだめ、仕事の重要な部分を行ったかのように扱った。精力的に働いた者は食堂で十分に報いられるべきだと言って、まだ肉적인人々を肉적인慰撫へと招いた。称賛のために努力し、このためにより多く働くことに慣れている者がおり、この点で大いに彼らを非難したが、神への畏れや人間としての恥について何ら顧慮せず、完全に怠惰と無為に身を委ねる者たちよりはずっと好ましいと思っていた。

この最も慎み深い人はこうしたことや似たようなことをして外では労苦を軽減するようにし、病んだ者には病んだ者、強壮な者には強壮な者、幸せな者には幸せな者、悲しむ者には悲しむ者とすべてのもののように見えるようにした。肉적인人々にはある意味で肉적인であるように、栄光を求める人々にはまるで全力で同じものを求めているように見えた。「すべての人にすべてのものとなりました。ともかく、何人かでも救うためです」(一

コリ 9：22）と使徒が自分自身について述べたことを行った。

しかし、修道院に帰ると、これらすべてを世俗の衣服のように脱ぎ捨て、内的に抱いていた修道生活の形を言葉と行いで示した。内的には畏れるべき人として、外的には快活な人として自分を示し、愛において矯正すべき人々を柔和さで惹きつけた。実際、彼は完全に人々の魂に配慮していた。さらに、外にあるものについて、すなわち肉体、いやむしろ労働を管理者として見守り、より自由になされるように規律の厳しさをいくらか緩和した。あらゆる点で完全なこのバシリカは彼の徳と兄弟たちの労働の証人である。多くの地方で美しさ、優雅さ、魅力、そしてなによりも建物の頑丈さと無傷な状態という点で似たようなものは簡単には見つけれられない。海の向こうとこちらの多くの地方を旅した人々はこのことに証言を提供してくれる。

20. 同じ頃に非常に大きな飢饉と作物の欠乏が生じ、穀物が現在の2倍以上の高値で売れた。食料を持つ者はほとんど誰も見つからず、持つ者は何も持たないかのように隠した。というのも使徒が述べたように「分銅を重くし、エファ升を小さく」（アモ 8：5）するために、そして貧者の財布を空にし、困窮者を支えるもので自分の袋を満たすために、売るのによりよい時を待っていたからである。

それから、聖なる人は飢饉の始まりのことをほとんど顧慮せず、重荷を背負う多くの農民の労働者を至るところから連れて来たので、一見すると小教区全体が集まったように思えたであろう。パンのためだけに彼らを雇った。非常に多くの人を集めたのは、食事を与えて、建設の作業を速めるためであった。

修道院の門に至るところから数えきれないほどの非常に多くの貧者が殺到した。無駄足を踏んだと言って嘆く者はなく、食べ物を与えられずに帰る者もいなかった。一日の九時課から兄弟全員が、そこにいる者は誰でも、食料の分配に従事し、結局、遅くまで終わらなかった。食事の残りに加え

て、この食料は貯蔵庫とかまどから絶え間なく提供された。ほとんど毎日かまどで調理されたすべてのものが施され、一日に二、三度パンを焼く用意ができていた。

この貧者に対する慣習は常にいつも守られたが、とりわけ飢饉のときにそうだった。もしパンがなければ、肉が施された。パンとともにスープが常に与えられた。これを任された兄弟たちは至るところを駆け回り、地下の貯蔵庫と隠された倉庫のすべてを搜索し、地下の隠された溝や窪みから古い食料を取り出した。どのようなやり方で、あるいはどのような価格で買おうとも、公の市場の価格を高騰させないということと空手では帰らないということを除いては、購入係に何も課されることはなかった。もし代価がなければ、彼らを不当な金貸しから常に守り、惨めな欠乏状態にあることを決して許さない人のことを信じて、どこかから借りて受け取れることをためらってはならなかった。

もし金が残っているならば、聖なる人はそれを宝物庫に退蔵せずに、購入係と分配係を呼び、量ったり数えたりせずに彼らに手渡した。かまどから取り出されたり、必要な場所に分配されたりしたパンは決して数えられなかった。

とりわけ神の人を前にして誰も敢えて日々の費用や支出を計算しなかった。これらすべてのものの重さ、数、大きさは与え主の神だけのものであった。こうした自由を与えられ、僕たちはより慎重でより細心になり、彼らに任された事柄に関して不正を被ることと同じほど不正を犯すことを恐れた。しかし今、私たちが誰も信じず、すべてのものを数えるならば、私たち自身が信用されないことになり、誠実な僕たちから不誠実な僕たちをつくりだすことになる。神の財産を自分たちのもののように数えて、神を喜ばすのではなく、すべての善きものをお与えになる神を怒らせることになるだろう。

21. 神の人は修道士の兄弟、姉妹、客人、使用人、様々な種類の労働者

の世話を担い、彼らのための日々の食料が熱心に用意されたが、最大の配慮は貧者に対して向けられた。貧者に与えるものがある限りは、他の者たちに欠けるものはないということを確かに知っていた。それゆえ、修道院だけでなくすべてのグランギアにおいて、とりわけ飢饉の際には、こうした場所が貧者に関して祝福を得られるように寛大に施すよう命じた。

ある日、ドルドーニュ川の向こうにあるグランギアを管理する兄弟が来て¹⁸⁾、兄弟たちに出すものも、貧者に施すものも何もないと言った。聖なる人は兄弟については何も返事をせずに、貧者について「行って、パンがなければ、家畜を殺して貧者に施しなさい。犁を引く牛を除いて。ついに何もなくなったら、ためらうことなく牛を使いなさい」と言って命じた。

その兄弟は命じられたように行うつもりで立ち去った。しかし、かろうじて三日間足りるだけの小麦があったので、直ちにそれを使うことを決心し、後で命じられたように兄弟たちに食料を購入し、貧者に肉を与えるようにした。見よ、日々の小麦の不足が予想され、恐れられたが、神がお与えになり、聖なる人の信仰が協力して大いに増加し、遠い先であった収穫の時まで、その時々可能な限り、兄弟にも貧者にも十分なパンがあった。

22. この時、飢饉は悪化し続け、マルテルと呼ばれる村に、一人は司祭でもう一人は俗人の二人の男が40 モディウスの混合した穀物を共同で所有していると神の人は聞いた。1 モディウスは4頭か5頭の家畜に相当している。彼はそこに急いで行った。価格や条件を満たすものを何も持たなかったが、上述の穀物を確保し、修道院に送った。穀物はひどい状態で積みまれていたが、善き購入者の信仰によって増加し、欠乏していた修道院全体を元気づけ、長い間十分に養った。

しかし、支払いの時が来ると、支払うものが何もなかった。何をしたらいいのか長い間迷っていた。結局、何も差し出すものがなかったが、少なくとも姿を見せるためにその村へ行った。そこに着くと、支払いを求める人々の顔、特に貪欲でけちで冷酷で粗野で無情な一人の顔を見るのを恐れ

た。教会へ行き、それからミサを執行したと言われる。

それが終わると、外に出た。村のほとんどすべての住民が彼に向かって押し寄せたとき、人々の中に特に恐れていたその債権者がいた。神の人が謙虚に立っていて、負債の支払いのことで——彼にはそう思われた——悩んでいるのを見て、全員の前で「これは何でしょう、院長様。私と司祭に借りていることをよくお知りのお金を持ってきたのでしょうか。この時間から利息なしでは何もあなたから受け取りませんよ。知っておいてください」と言った。神の人は彼に「実を言うと、今あなたに返せるものは何も持っていません。ですから、主が私たちにお与えになるまで待ってくださいようお願い申し上げます。そうすればあなたを満足させることができるでしょう」と言った。すると、彼は苛立ったように——神によって和らげられていたのであるが——全員の前で返答した。「聞いている限りでは、主よ、あなたは私たちをからかいに来たようですね。私たちの穀物を持って行って、代価は持って来ない。私の収穫物を消費したすべての修道士を人質とし私に引き渡すという条件でないと私を満足させることはできませんよ。私が支払われるべきものを受け取るまでその間は私が彼らに食事を出すようにします」。全員がこの話を聞いて笑い出した。この売った人の仲間の司祭が呼ばれると「マルクよ——彼はそう呼ばれた——院長と結んだこの契約は気に入ったか」と言った。「どんな契約だ」と司祭は尋ねた。「兄弟たちを人質として引き渡し、支払われるべきものを受け取るまでは私たちが食べさせるという条件だ」。しかし、「この契約を守るんだね。君が提示したのだから。私は守らないよ」と司祭が答えた。すると、もはや債権者ではなく、今や保護者となったこの男が神の人に「気にせずにお望みのところへ行ってください、院長様。私自身と司祭のために、あなたが望まれること、おできになることを除いては負債を支払わなくても結構です」と言った。こうしてその場にいた全員がこの非常に貪欲な男の中に「いと高き方の右の手」によるこれほど大きな変化を見て（詩 77：11）、

神の栄光を称えた。

少し後に、その男は亡くなったが、自分に負っている代価の半分、すなわち 500 スーを修道院に遺贈した。残りの 500 スーは自分の息子に譲るように定めた。息子は父よりも感じがよく、物惜しみしない人だったので、この自分に支払われるべき 500 スーをすべて免除し、自分の財産から何度も他の多くのものを贈与した。実際、聖人の葬儀に参加したとき、自分の財産から多くのものを贈与したので生涯にわたって聖人の墓に灯明が絶えることはなかった。

この司祭には自分に属する聖職者がいたが、この人を修道院に委ねた。前述の売却により彼に支払われるべきであった 1000 スーを免除し、さらにこの聖職者の扶養のために数モディウスの混合した穀物を追加した。こうして神の人において「神を愛する者たちには万事が共に働いて益になる」（ロマ 8：28）と使徒が述べたことが実現した。

23. また別の時、この聖なる人が病室にいと、彼のところに管財係が来て、悲しい顔をして口を閉ざしたまま彼の隣に座った。神の人は彼に「兄弟よ、どうして悲しそうにここに座って、何も言わないのか」と言った。「主よ、私は悲しいのです。兄弟たちが今日は何も食べていないのですから。食事の時間が近づいているのに兄弟たちを元気づけるように出すパンがないのです」と答えた。この時、彼はいつものように天上に目と手を挙げて深く溜息をついた。ようやく疑っている兄弟の方を向き、「それでは、兄弟よ、兄弟たちが今日は食べられないとあなただけに明かされたのか。主の手は短いのだろうか（民 11：23）。あるいはあなたにパンがないからといって主は配るものがないのだろうか。迷わずに行きなさい、そしていつものように急いで食事を用意しなさい。私は神に希望を抱き、信頼しています。主は自分に仕える者を食べ物がない状態にしておかないでしょう」と彼を叱り、注意した。管財係はこれを信じ、従った。食堂をすぐに用意し、布で食卓を飾った。見よ、兄弟たちが食事の前の聖務日課に

聖堂で歌っていたとき、突然、パンを背負った家畜が入ってきた。これは神に靈感を受けた信仰深い人々が食事を補充するために彼らに送ったのだと信じられている。この時、兄弟たちは食事ができるとは期待していなかったが、聖堂から出てくると尋常でないパンであふれる食卓に気付いた。それゆえ、十分に満腹した後に、与え主の神に感謝し、その後は困窮しているときでも神の豊かさを疑えなくなった。

24. 私たちの裁治権の下にだいぶ前に移されたグロブ修道院でかつて似たようなことが起こった話を私たちは目撃者から聞いた。

ある日、エティエンヌの弟子の一人であったこの修道院長のところへ管財係が来た。修道院全体で3個しかパンがないと言った。それゆえ、パンがないときに食事の鐘が鳴らされるべきかどうか、見つかったこの3つのパンについてどのようにすべきかを尋ねた。院長は上からの助言に導かれて、習慣通りに死者たちの割り当てに3リーヴルのパンをとっておき、聖務日課の後に手洗いのために鐘を鳴らし、パンの代わりに食卓にスープを置くように命じた。

聖堂で終わりつつある聖務日課を唱えていたときに、土地の領主でこの場所の創建者が思いがけずやってきた。習慣通りに回廊に入り、いつものように他の建物を歩いて回った。誰も敢えて彼を止めなかった。食堂に入り、パンなしでスープだけが出されているのを見ると、急いで出て、自分と仲間の馬を隣り村に走らせた。代価を支払って売り物のパンをすべて買い占めさせ、修道院に送らせた。

兄弟たちは聖務日課の後に食堂に入り、食事の用意をした。突然、食べている間に、思いがけなくかごいっぱいパンが運ばれてきた。その日と翌日は十分に食べられた。

25. 同じようにボネーグ修道院で——ここで聖人はこの世を去った——聖木曜日に数えきれない貧者の大群がいつも以上に詰め掛けた。見つけれだけのパンを施すと、まだ貧者は残っていたので、必要に迫られて、

兄弟たちは食事に出されたすべてのパンを配った。もう食べるものがなかったの、院長はお金を出して兄弟たちの使用のためにパンを買うように命じた。見よ、パンがいつも保存される修道院の箱が上まで満杯になっているのが発見された。これで彼らはこの日と翌日に食事ができた。それゆえ、神の人は自身の修道院で信仰のしるしを見せるだけでは満足せず、彼に属する他の修道院においても死後に弟子を通じてこのような同じしるしを示したのであった。

26. 私たちの修道院でも飢饉の間、特に復活祭から収穫の時期までは、毎日非常に多くの貧者の群れが集まり、通常は3000人を超えた。このために、上述したように、購入係が家畜を連れて至るところに走り、代価を払ったり、支払いを約束したりして、見つけられるだけの穀物を修道院に持って帰った。それでパンが兄弟たちと客人と貧者に他に何もなくなるともそれで十分に生きられるように提供された。この時期が終わると、彼らが契約した負債を計算し始め、3000スー以上が累積していると見積もり、1スーも超過がないことを喜んだ。実際、彼らが支払った人が免除したのである。

至るところで深刻な飢饉がこの土地に激しく襲いかかった。聖人の祝日の周年記念でいつものように祝っていたが、非常に多くの貧者の群れが集まった。そこにいた俗人たちは15000人と推計され、もっと少なく推計する者もいたが、全員が間違いなく10000人以上はいると言った。

いつものように各人に1リーヴル半の丸パン、慣習的な分量の豆がワインとともに与えられた。常にそうであったし、今日でもそうであるが、年寄りも若者も同じ分量が与えられ、女性は揺りかごの子も含めて連れてきた子供の数だけ受け取った。しかし、多くの地方からこの壮観に集まった騎士やその貴顕は、兄弟たちとともに分配する習慣であったが、貧者の大群を見て用意されたパンの少なさを案じて、パンは貧者の10分の1にも足りないと言って大声で叫び始めた。それで、全員が少量でも受け取れる

ようにパンを細かく分けるように助言した。しかし、この点で彼らは聞き入れられなかった。むしろ逆に神の名と聖人の力を信じ、神の助力を嘆願して、大いなる希望、信頼、喜びとともに最初はパン、次に豆、最後にワインを分配し始めた。日没までに慣習的な分量が全員に、最初の人から最後の時まで、最年長の人から最年少の人まで分配されたとき、貧者たちは立ち上がった。神の豊かさを称え、聖なる父を祝福する人々から非常に大きな叫び声上がり、大地が彼らの叫びで揺れるかのようにだった。実際、この時はかつて恐れのために泣いた以上に喜びと大いなる奇跡のために泣いたのだった。とりわけパンを細かく分けるように説得した人々は泣いて、たとえ分配が朝まで続いたとしても、貧者がいる限りはパンも尽きなかっただろうと公言した。さらに、このことはこの聖人の日や多くの他の日に何度も起こったことが証明された。すなわち、貧者に分配するパンが少ないと考えられれば考えられるほどますます満ちあふれたのである。

注

- 1) ボネーグ (Bonnaigue) 修道院のこと。
- 2) ル・ペストル (Le Pestre) 修道院のこと。
- 3) ボネーグの初代院長はジャンとされる。
- 4) ベゴン・デスコライユのこと。
- 5) ヴァレット (Valette) のこと。
- 6) ローマ近郊のトレ・ファンネ (Tre Fontane) 修道院の院長の後に、1145 年 2 月 25 日にエウゲニウス三世として教皇に就任した。
- 7) レナールは 1133 年から 1150 年までシトー院長であった。
- 8) 1060 年に創建されたポール・デュー (Port-Dieu) 修道院かその支院のサン・ロベール (Saint Robert) またはヴェドレンヌ (Védrennes) のことと考えられる。
- 9) 1134 年に修道会総会でクレルヴォー院長ベルナールが主宰する委員会が設けられ、典礼の改革がなされた。
- 10) グロン修道院は 1163 年にシトー会に加入した。
- 11) 『聖ベネディクトの戒律』36 章を参照。
- 12) ラ・ガルド・デュー (La Garde-Dieu) 修道院とラ・フルナド (La Frenade) 修道院のこと。

- 13) サント司教ベルナール（1141-1166）。
- 14) プールジュ大司教ピエール・ド・ラ・シャートル（1141-1171）。
- 15) ベネディクト戒律の3章で引用。
- 16) 『聖ベネディクトの戒律』3章。
- 17) Tertullianus, *Apologetica*, V, 2, *Corpus Christianorum Series Latina*1, Turnhout, 1954, p. 95.
- 18) エティエンヌの時代にはレ・ザリ・サン・ソヴール（Les Alis-Saint-Sauveur）とラ・ダム（La Dame）の2つのグランギアが存在した。